

共産同(RG)批判への基本視点・メモ 1974.1  
革左(神)派の坂口君を批判す 1974.1

12.10 破防法弾劾集会へのアピール (1973.12)

2.13 山谷反弾圧連帶集会へのアピール (1974.2)

2.16 破防法裁判勝利・革マル襲撃弾劾集会へのアピール (1974.2)

☆

ブルジョア・マスコミの無節操かつ小ブル自由主義的  
使用に反対! 1974.1 坂東国男

## R.G批判への基本視点・メモ

1

「論叢163」のR.G批判の基本観点は有効であること。あそこに足らぬのは、価値論関係について批判点を提起していない点です。要するに、「共産主義」14・15号（連合ブランド）の榎原・旭凡両君の「宇野批判—価値論」の批判に触れていない点です。この点を補足し、「過渡期世界論」の

小ブル反スタ主義の観点からの批判に反論を加え、資本主義批判でもって「過渡期世界論」を再構成し、その集約としての日本資本主義批判（綱領作戦略、陣型問題）を展開すればよいのです。

2 榎原・旭凡論文は、ともに資本主義の特徴を「労働と所有の分離」に求めていたこと、他方では、賃金奴隸制のことも述べてはいるが、この関連が全くはつきりしない。

「労働と所有の分離」は、基本的には、「剩余価値の生産」の貫徹の蓄積論における展開形態であり、基本的には剩余価値法則の派生現象なのです。

スター・リンの「単純商品経済は価値法則」「資本主義経済

は剩余価値法則、「帝国主義は最大限利潤の法則」に反撥した、「資本主義の法則は価値法則」の宇野の主張に迎合して、資本主義の最大の経済的法則たる剩余価値法則の意義を無視、ないしは軽視している。「剩余価値法則」は、資本主義の経済上の法則であり、この経済政治的（階級的）規定こそが賃金奴隸制です。

「資本主義の規定的目的であり、推進的動機」である剩余価値の生産が忘却視されているところに、両君の資本主義批判の小ブル性があること（小ブル反スタ主義の）、価値法則と剩余価値法則との関連が正しく扱えきれていないこと。

3 「労働と所有の分離」の強調は、「労働力の商品化」が前提ではなく、蓄積の結果であることを強調し、宇野を批判する為に導入され、また、経済主義・組合主義（生産点主義）を批判し、街頭主義の「所有の問題は生産点では提出されない」を強調するため導入されているようだが、剩余価値の生産の問題を切り離してそのように提出するのは間違いで

す。

4 宇野の、資本と賃労働は「互いに独立した私人の交換關係」（ブルジア自由主義・個人主義の経済学的表現）を批判し、「資本と賃労働の関係は交換関係ではない」とを強調し、組合主義や社民批判を展開せんとしているのは

正しいが、これをエスカレートさせて、「資本と賃労働の関係は価値関係ではない」というトンドもない原則的な価値論における誤ちを犯している。

価値関係とは、交換関係も含むが、本質的には、商品・経済社会における人と人の生産・分配の交換関係・社会関係を含む総体であり、交換関係に一面化されはしない。

資本と賃労働の関係は交換関係ではない——部分的なこの

ような現象形態をもつが——が、価値関係であること。資本

は資本と賃労働という価値関係を内包した価値である（他面では、具体的有用労働の凝固でもあるが）こと。価値の本質的な把握ができるないと、資本の本質がわからず、資本を単なるモノや量的大きさに一面化してしまうが、彼等（特に榎原君）には、そのような危険性があること。

5 生産点では「労働と所有の問題（労働と所有の関係の批判？）は提出されない」という主張を展開しているが、このような提出の仕方は、「主体の場所的関係によつて、所有の問題を提出したりしなかつたりする問題がある」かの如き、誤った観念を生み出すこと。このような主張は、「生産点で資本主義の根底的、全体的批判が出来ない場合、個別資本に対する改良的要求斗争に埋没してしまう」ことの指摘にはなつたとしても、正しい「資本主義批判と党活動」があれば、生産点で革命的政治斗争が展開出来ることを、隠蔽一否定す

のだが、何故に、この混同が決定的な意義を有しているか、その価値論に於ける意義が解明されていないが故に、スッキリしていかない。

9 このような、価値論に於ける無理解は、価値の実存条件が「社会的分業と私的生産にもとづく交換」にあることを指摘した田原君の指摘を批判している点を見受けたが、——記憶達いがあるかもしれないが——、これは、榎原君の指摘が誤りです。

10 スターリン経済学の批判を、その教条性、俗流性、部分的修正主義におかず、全否定をやろうとするが為に、その中に潜む正しい命題や指摘すら洗い流していること。

我々は、スターリンの諸体系を、どれひとつ規範にしたりすることはせず、常に批判的に対処するが、スターリンの作品なら、なんでもかんでも否定せんとし、レーニンやエンゲルスまで否定してゆく小ブル反スタマルクス主義とは断乎対決する。（スターリンは、二十年代には一面ではレーニンの忠実な継承者の側面も持っていた）。

マルクスやエンゲルスやレーニンの命題に対しても、スター

リン主義に仕立てあげて批判してゆく、混乱した理論家が沢山いるのには困ったものである。

る街頭主義、召還主義の主張になること。

「労働と所有の矛盾を提出するか否か」は、（主体の）場所であるとか、「直接的生産過程」か「蓄積の再生産過程」かの二者择一にある、とかではなくてこれに關わりあいのない、日常的市民主義的意識に、外から、資本主義批判の階級意識を持ち込むか否かにかかっているのです。

6 「労働と所有の分離」をイコール（＝）「資本と賃労働の関係の再生産」と把え、かつ、これを賃金奴隸制度の実存条件、実存過程であるかの如く、主張する意見（特に旭凡）は、一面的です。

蓄積過程でも論証されているがぼそうだからといって、それだけではなく、マルクスは、直接的生産過程（絶対的剩余価値の生産、との合同）でも、十分、基本的に展開している。蓄積論のみで、賃金奴隸制度を論証する考えは一面的で、誤りです。

7 「労働の二面的作用」の把握の宇野一黒田に影響され、ワケもわからず、混乱していくこと。

8 榎原君は、宇野が労働の把握に於いて「商品にあらわされる労働の二重性」と生きた労働の二重性の把握」とを混同しているとして、これを要旨にして宇野批判を展開している

11 いざれにせよ、両君はともに、「剩余価値の生産」「賃金奴隸制」を、マルクス資本論の立場・方法・觀点に立つて正しく把えられてはず、組合主義の克服の余り、又、自己の

詩二十一

「共产主義」14号では、戦々に対し、レーニンが「國の主張」、即ち、十月革命の主張を示す。この文題の主張は、以下に示す。

的を党・軍を世界党・赤軍に改組しきれずしたことによつて敗北したことを、指摘[]認識しておらず、党建設の観点から把えきれていないことを実践上の批判の眼目に据えているわけですが、これはウソです。我々のパンフ（「赤軍」）版4には、ちゃんとこのことを指摘しているのです。むしろ彼等が我々の主張を剽窃しているのです。このようなヒョウセツは、「スタ・ブハ綱領批判」に於ける「単純寄せ集め総和革命批判」のヒョウセツとなつてあらわれている。彼等が最初に、スタ・ブハ綱領の批判者であつたかの如き、歴史の偽造をおこなつてゐるが、これは全くのデマ・ゴギーです。

以上の、ウソとヒヨウセツの上に、「共産主義」14号で連合派はパンフ6.4でケチをつけた。ケチつけ批判は、

部分的には資本主義批判、賃金奴隸の批判の観点がない。又、反スターマルク主義に対する党派性が理論的に展開されていない等の、比較的正しい批判も含まれているのですが、批判の基調は、反スターマルクス主義の観点から、「スターリン主義と同一だ」という、黒寛に依拠した批判であること。

て、全世界各国に伝播させ、共産党を成立させたこと。また、ロシア・プロ独国家それ自体が、国際階級斗争に対し、軍事的にも、攻勢の根拠になつてゐる。

ロシア革命がスターリン主義に変質してゆけば、一面では攻撃的でなくなっているから、一般化して定式化することはない」という意見があるかもしれないが、これは小ブルジョアの反スターリニズムの意見であって、誤っています。

確かに、攻撃的であるか否かは、プロ国家の党的路線如何によつて、主体的には、決定される側面をもつてゐる。プロ国家の党的路線の主体的要素を抜きにして、論ずること出来ない。ことでスターリニズムが全面化し、コミニテル

ノが完全に右翼的変質をなした三十年代以降は、  
だが、他方で、このようにプロ独國家（国際根拠地国家）  
の党の路線を変質させる為には、これを軸にして結合され  
た国際プロレタリアートの斗いを抑圧する為には、国際帝国主

主義の反革命体制（対プロ国家、対資本主義圏内のプロレタリア人民の革命斗争）を持続せざるを得ず、恐慌や市場再分割戦をストレートには展開することが出来ない。また、農業植民地戦略を展開せざるを得ない。このようにして、国際主義は、この世界史階級関係の変化対処する方策の展開のそれ自体の中に攻撃的階級斗争の攻撃性を内在化せざるを得ないこと。

「渡期世界論」を清算しようとしている。

② 「階級斗争に何か発展法則があるかの如き把握」、「一  
リーン的法則主義で法則摘用論」であるといふ批判は、過渡  
期世界に入つて、階級斗争は「受動から攻撃に変化したこと  
」を、右翼的に批判する見解であること。階級斗争に法則が  
あることは自明ですし、この法則を最大限、発見、解明し、  
革命斗争に適用するのは唯物論的、マルクス的考え方であり、  
「法則の否定」、「摘要否定」は、観念論の不可知論であり、  
弁物論や史的唯物論、マルクス、レーニンの解明した資本主  
義社会の法則を否定する全くの非マルクス主義的見解である。  
スター・リーンを引き合いに出して、マルクス主義を否定してい  
るのです。マルクス・レーニン主義の「一つの原理」で世界

國際帝国主義の危機（一般には、帝国主義の腐朽性、寄生性、或いは、高い生産力と生産関係の矛盾）を物質的、内的基礎。とし、ロシアに於ける、支配階級として組織されたプロレタリアの形成、プロ独の成立、プロ独の建設を主体的契機として、世界革命の根拠地が生まれ、階級斗争が攻撃的に転換したことは、明確なのです。具体的には、ロシア革命の経験の獲得と、これを、コミニテルノープロ独国家を拠点とし

つまり、プロ党一プロ国家が変質すること自体が、国際帝国主義の側に内部矛盾を徹底させざるを得ないこと。例えば反ファシズム統一戦線から帝国主義戦争へのコミニテルンの包囲は、逆に中国革命の発展をもたらしたこと等、(逆制約の能動のテーゼとしての貫徹)。又、独革命にみられる如く前段階決戦を成熟させざるを得なかつたこと。

要するに、ロシア革命の経験の総括としてのマルクス・レーニン主義の確立とその組織的な世界的定着化は、たとえ、ロシア革命の変質があったとしても、それ自体、消滅しはないこと。いったん、マルクス・レーニン主義が普遍化され以上、たとえ、スターリン主義が成立しても消し去られることないこと。

実際的には、マルクス・レーニン主義はロシアで、スターリン主義に変質。置換したが、中国革命に結合し、決定的

力を發揮したこと。

革マル等、小ブル反スターリン主義者は、ロシア革命以降の中国・朝鮮、ベトナム革命の意義を認めないが故に（二十年代のスターリンの一定の左翼性も含めて）「攻撃的階級斗争は成立していないし、スターリンを免罪するものだ」等の頓馬な意見を述べることになる。我々が、この意見に對して、有效地に反論しきれていたのは、ロシア革命の意義を正しく評価出来ず、正面からの反論が出来ずにいたことに原因があるからであるのです。

要は「反マタ主義に惑われて」、ロシア革命（つまりレーニン主義の）の世界史的意義が全く理解されていらず、ロジア革命の意義を否定してしまっていること。

④ 「大歴史—中歴史—小歴史」の方法は、「史的唯物論の体系化」であり、「歴史的哲学」に継がる云々

史的唯物論の觀点をしっかりとおさえつつ、これを現実形態的に、この内容を資本主義分析批判から展開してゆくこと。この觀点からスターリン主義の規定を行うのは正しい。但し、「史的唯物論の体系化、法則化的把握」なる批判は、全くの非マルクス主義である。歴史の発展を一つの法則として「自然史的に把握する」（マルクス）のは、マルクス主義の基本觀点である。

⑤ 「史的唯物論の体系化」のみで、「資本主義批判」「分析からのプロレタリア革命の不可避性、条件、プロレタリア

「一トの位置」のマルクス主義的分析の方法がとられていない、とする批判は全くのウソである。私は、パンフ164・第三章で、「現代帝国主義批判」「分析として、反革命」「侵略・抑圧戦争の恒常化を媒介に世界革命戦争が成長せざるを得ない」とを正しい方法的立場で展開している。現代帝国主義論や農業植民地分割が弱く、一面的である点はあるが、「対象を資本に置き、この対象分析を通して、革命の必然性を明らかにしていること。」ただ、現代過渡期に於ける「物質的。経済的基礎から革命の不可避性、条件、戦略、戦術を明らかにする」方法は、単純帝国主義一元論的には明らかにされえず、プロ国家を含む国際的相互関係の特殊要素を組み入れないと分析しきれないこと。この点にこそ、過渡期世界分析の要衝があり、難しさがあること。（経済決定論では分析しきれないこと）、だから、臨総派の欠陥や千葉君の「世界資本主義論」の欠陥も、問題はその点にある。

⑥ 私が当時、「資本主義の否定的契機—階級斗争」、「ブルジョアの一国性とプロレタリアの世界性の矛盾」等のそれ自体は正しいけれども、歴史哲學的な叙述をしたりしているのは、その通りで、それは、資本主義の原則的批判が弱いせいであるが、しかし、それ自体は正しいこと。

私が、藤本進治の影響を大学時代に受けた点があるの

で、「世界武装プロの把握」を、「革命の哲学」の觀点で把

えていたという批判があるが、この批判の觀点から「ヘーゲ

ル主義」、「自然成長論の客観主義」、「転びの弁証法」などの批判が投げかかれているようだが、これは事実無根である。

藤本進治は、確かに「労働の私有性と社会性の二重性の矛盾の自己展開」として、革命の必然性を展開し、そこには、全く「資本の運動がなく——従つて資本主義の批判のない」点で、その批判が当たるのだが、私の場合、「産業資本主義」、「帝国主義」の対象規定と対象から、プロレタリアの位置を規定する方法的立場をとっている。藤本は、この「労働の二重性」（マルクスのそれではない。）を起点にして、全く異なる識論を主張しているわけだが、「マルクス的な労働の分析では全くないこと。つまり、「価値と使用価値」の、或いは、資本の成立と労働の資本としての作用の分析は皆無であり、基本的には、民主主義でしかないこと。

字野を、當時、理論的に批判していかなかったが、パンフ

164で「労働力商品所有者」とは規定していない。「労働力商品」とはいってはいるが、これは正しい。

⑦ 「人間の位相転換」は、過渡期世界が世界アプロ独の世界革命戦争であり、変革期である以上、上部構造の下部構造への反作用力が増大する点でも、正しい指摘です。これをもって「無政府主義」とシテルを貼るのは、史的唯物論の命題の放棄です。

⑧ 「階級斗争が攻撃的になつてゐるか否かは、党の問題だ。スターリン主義が存在しているから、これは全く誤って

いる。」といふ見解があるが、攻撃的であるか否かは、客主両面に於いて分析されるべきで、攻撃性（世界革命戦争で恒常的内乱の状態）は、客観的にあること、主観的には、スターリン主義は反動的で社帝化して論外だが、中・朝・ペー、アジア三国はスターリン主義からの離脱の過程にあること等からして、まさに「党の問題」として、攻撃的になつてゐること。（勿論、限界性のあるものだが）。そのような主張をする諸君は、本質は革マル的反スターリン主義の裏切り史観（自己絶対化と、他は全て否定する）に深く冒されてゐる人々です。

⑨ 「逆制約の能動的テーゼ」は一面的で正確な反映ではない。これは間違います。この否定こそが、全ゆる右翼日和見主義者の最大関心事なのです。何故ならば、ここから「世界革命戦争—民族解放戦争—前段階決戦の遊撃戦を含む、恒常的内乱—アプロ国家の根拠地化」が導かれるからです。

世界史的階級關係の變化を内包化した國際帝国主義は、侵略剽窃としての臨総パンフへの反批判ですが、これ程は手の込んでいない、純正反スターリン主義の立場からの単純な批判として、その右翼的なものとしては、日向翔君の「世界プロレタリアートは、スターリン主義が存在し、分断している以上、存在しない。スターリン主義の美化だ。観念的小ブル反スターリン・キザム（観念の中での「左」翼性と実際上の右翼性）の自

己絶対化であり、他潮流は全て反革命と規定する見解で、當時、彼は、中国革命は勿論、民族解放斗争も否定していた。スターリン主義に關しては、反スターロツキズムの觀念ではなく、正しい否定の仕方をしなければならない。（「論叢」163参照）

⑤ 今ひとりの純正反スターロツキズムの左翼として、小ブルゲリラ主義者の見解がある。

要は「体制間矛盾論・全般的危機論のスターリン主義者」の見解、「史的唯物論の物神化であり、攻撃性は資本と賃労働の觀点から明らかにされるべきだ。」といふ見解です。この見解は一面、正しいようですが、単純經濟決定論で、反帝一元論で、現代帝国主義や農業、植民地問題、過渡期社会の特質等を把える姿勢および觀念は全くなく、更に、レーニン帝国主義の立場と發展を修正して、ローザ・ルクセンブルクの「資本蓄積論」及び、岩田弘の「世界資本主義」に依拠した代物です。——といつても、明確な理論的体系性をもつて主張しているのではなく、極めて断片的な指摘にとどまるものだが――。

「資本主義は、非資本主義ウクラウドを分解し、一方では農民をプロレタリア化し、これを搾取し剩余価値を生産し、かつ、これを、非資本主義を市場（主要には農民）にして、つまり、非資本主義ウクラウドを商品経済化することによって、分解しつつ、実現してゆく」。ローザはこのように、剩余価値の生産と実現の経過（或い

は再生産過程）を把え、ここから、「資本主義は、非資本主義ウクラウドなしには存立出来ない。非資本主義ウクラウドが分解され尽したら、資本主義は生命力を失ない、自動崩壊すること」の命題を導き、これを國際化・先進資本主義と農業植民地國の關係に当てはめ、「それ故に帝国主義は非資本主義ウクラウドを存立条件にするがため、帝国主義の植民地主義は不可避」であるとし、帝国主義の植民地主義と市場再分割を理論的に把えようとしたわけです。ここから、ローザは先進国プロレタリアと農業、植民地國の斗争の連帶を訴えたのです。（ただし、帝国主義經濟主義だが）。ローザはマルクスの蓄積論と再生産論を一面化し、かつ、帝国主義段階に機械的に導入した自動崩壊論であり、民族自決斗争の意義を否定し、平板な世界プロレタリア革命を主張し、この点に於いてレーニンに批判されたわけだが、我がグリラ主義者は、このようなローザ的主張の漠然とした理解と、岩田弘の「工業国と農業国が機軸的蓄積關係を機軸にして、商品經濟社会として、單一に配置され、有機的に統一される」の見解（これはレーニンの帝国主義論や獨占・資本の過剰・不均等發展を修正している見解）や宇野弘蔵の見解等をましい超過利潤の源泉である」のだが、だからといって「商品經濟化し終つたら、資本主義の生命力は失くなり、自動崩壊一不均等發展を修正している見解）や宇野弘蔵の見解等を

確かに「非資本主義のウクラウドの商品經濟化は、最も望ましい超利潤の源泉である」のだが、だからといって「商品經濟化し終つたら、資本主義の生命力は失くなり、自動崩壊一不均等發展を修正している見解）や宇野弘蔵の見解等を

壊する」とは理論化し得ない。実現の問題は「非資本主義か、資本主義か」境界があるのでなく、生産力や利潤率の差異から生ずる資本主義的競争によって解決されるわけであって、プロレタリア世界革命の不可避免性は、マルクス資本論の見解を踏まえつつ、現代的には、「農業、植民地國を自己の再生産構造に組み入れた、國際帝国主義の蓄積構造（これ自体、過渡期世界の世界史階級關係に契機づけられている）を物質的基礎とする侵略・抑圧・反革命の階級危機」に基づいている。いすれにせよ、現代帝国主義の等質、農業・植民地國プロリタリアの特徴や諸関連を、彼の理論では把えられるものではないこと。（以上の批判を「論叢」163に補足しておきます。）

⑥ 尚、過渡期世界論を、その正しい姿勢と意図にも関わらず、發展出来ず、縮小化するにとどまる傾向として、「世界史的階級關係の變化」を万能化し、そこから武斗や革命戦争を觀念的に整合しようとする「世界史的三段階論」や、あるいは、反スターロツキズムの反撥の余り、毛沢東思想に乗り移り、これを絶対化して、「過渡期世界論」の「首尾一貫した」發展を目指す混乱も生み出されたこと。この誤ちは「史的唯物論」を万能化し、資本主義批判によって史的唯物論の命題を科学的に論証してゆこうとする方向が見失なわれることに起因しています。

16 「スター・リン経営細胞論批判」「レーニンの一同志への手紙の復讐」とかと称して、ゲリラ主義の戦斗団主義的組織形態の改ざんとしての「P.B.II軍事委・R.G.II政治軍隊」

「軍事組織の党」とか主張し、自己の召還主義を、「軍事」を押し出してごまかそうとしている。

17 自己の召還主義を正当化する為に、「純粹民主主義者」を批判しつつ、逆にそのことによって帝国主義的經濟主義に陥ち込み、階級斗争から召還し切つてしまっていること。

(一九七四。一)

18 「中央集権的党建設抜きのドブレ組織論に因」という批判は全く的はずれ。我々はこのようを命題を否定してはいな。むしろその反対である。思想的政治的限界性故に、結果的に強いられて、分散性や戦斗団主義的傾向に陥つたが、これらを路線化、理論化していくわけではない。また、連合ブランドは自己の日和見主義を隠蔽する為に、七・六以降、一貫して「ドブレ主義」とか、「無原則な党派斗争」「党建設がない」などの誹謗をおこなつて、我々に対する悪印象をバラまいてきたが、榎原君などは「赤軍派のフラクに入つたり出たり」し、一貫して動搖し続けてきた分子ではないか。連赤は敗北したけれども、だからといって君達が正しかったわけでは毛頭ないのです。それに如何にも「革命戦争派」らしく振舞っているが、七一年末の斗いを開いたのは必らず

しも君達の指導によるものではないこと。

19 赤軍派と革左(神)に奇生する、自己の斗いの経験や主張を全人民に還元しようとしない、——実際そのような経験も持つてない——サロンマルキスト的集團。

清算派の諸君が連合ブランドやR.G.の諸君の愚にもつかない批判に乗つかり、武装解除し、同盟の戦いを清算せんとするのは、全く悲しむべきことです。

(一九七四。一)

## 革左(神)派の坂口君を批判す

① 貴方は革左(神)の資料提供係り、現場の当事者、ス

ポークスマントして革左の獄中の諸君に犬馬の労を取つてゐるわけですが、私達にも必要な事実を提供せよとは言いませんが、度はずれ嘘を流さないだけの節度は取つて欲しい。

貴方は『塙見同志』等が、新党結成の際批判されず、新党を支持あるいは黙認したなる獄中革左のマッカナ嘘に對してきちんと打ち消す位の努力はして欲しいものです。川島渡辺同志は心から信じてか、或いは陰謀的にか——私は川島氏にもうずっと前にちゃんと証明したのに——しきりとこんなデマが流されているわけで嘘も百回言えば真実となる」といった具合に『真実』にされではたまらないのです。

② 私の「責任は永田君達の責に帰す事はできない」への革左の組織防衛主義。責任転嫁主義の小官僚的対応に對する批判に「内部干渉であり我々の自覺を去勢してしまふものです」といつていますが、これ程の愚論にお目にかかるとは思つてもいませんでした。

「内部干渉」だって！ 仮にも革命家をめざしプロレタ

リア党をかち取らんとする人の言動とは！ 政治組織である以上、論争の過中に置かれるのは当然ですし、連赤－「新党」敗北をめぐる赤軍派と革左、両組織はその当事者であり、両組織間を中止とする論争は不可避ですし、又、徹底して行うべきです。革命家や組織は内部干渉をされる事を光榮にすべきです。問題は内部干渉をされても攪乱されないだけのイデオロギー的結束力を持つべきなのです。

自分達の都合のいい主張だけを捻出し、自己の小世界に閉じ込もりその観念的なデータラメな主張が、紛糾され始めたら、「内部干渉をするな」なんて！ なんと御都合主義の官僚的言辞であることか！ こんな泣き言は毛派内部の間では通用しても、ひとたびブランド系左翼の中に入り込んだ以上許されないことを探つて欲しいのです。「去勢しようとする」、なんど非自主的。没主張的な言動か！

貴方は我々の意見が正しいと思うなら賛成し、そうでないならば反対すればいいのです。我々は主張の正当性以外に何らの道義的責任をも求めはしません。もう少し自立して欲しいのです。

我々は連赤総括論争の締めくくり段階にやっと入りかかっているし、それ故我々のまとまりつつある立場から、その政治的側面に関しては革左の諸君に対しても遠慮のない批判を展開してゆくつもりです。少々攻勢的に出て行くつもりです。従つて「内部干渉になるからお互にやめよう」なんて、日和見主義の官僚的対応なんて全くの問題外の笑うべき対象と考

えます。問題なのは論争の内容であり水準なのです。この点

で君達との論争では矮小極まる日共式のブルジョア実証主義に陥らみがちで、又、論争技術などで読者を攪乱させへきえさせることです。ともあれ論争の中止なんて我々の念頭に毛頭ないこと、これから本番と考えてることを知つて欲しい。

(3) 資方は「赤軍派は革左にまき込まれた」と赤軍派が言つてゐるかの如く迷つてゐるわけですが、我々のどの文章の中に、或いは唯の文章の中にこんな文句が見られるのか、例証して欲しい。

我々は確かに「反愛路線の誤ち」「山根路線の批判」「中國革命教條」が連赤敗北の一方の外的契機（我々にとって）になつてゐることは指摘し続けたが、だからといって「赤軍派は革左にまき込まれた」などといふ泣き言は一度も述べた覚えはない。こんな没主体的。被害者の発想は赤軍派にどうては無縁ですし我々は我々の連赤敗北の主体的要因について、は——貴君達にも共通する問題提起も含みつつ——えぐり、解明してきたつもりです。むしろそれはこのようない言動は君達の、我々からの強迫観念が呼び起した純然たるブルジョア的心理学の産物ではないのです。我々が君達を批判したからといって、そのことでもって「赤軍派が革左にまき込まれた」なんて考へてみると早合点しないで欲しい。今後二度と「赤軍派は革左にまきこまれた」と考へている「などと悪

のとして実際の権力斗争階級からの召換の名分として、山岳を条件とする観念上の「共産主義社会」の創出と銃によるせん減戦一銃の防衛は根拠地の防衛一がもちこまれつつ、思想斗争一整風の解決がブルジョア人間学の思想、整風運動とそり帰結としての暴力一ブルジョア厳罰主義の導入にすりかわり疎外化され二名「肅清」として現出したのです。この向山一早岐両君の肅清は連赤一新党の亞原形です。

尚、我々はブルタリアー的思想斗争一路線転換の疎外形態としての「共産主義化運動」に関しては次の事は最低押えておくべきです。

(1) 共産主義化運動は階級斗争の新段階への到達、小ブル革命主義からブルタリアー革命主義への総体の転換が、もつて斗争組織の階級的・思想性の検証を軸として闘われ、それは組織を構成する諸個人の思想性、倫理性、資質、規律、組織性等、思想一作風一規律（処罰）を厳格に問ひ、（具体的には規律の反面としての处罚の实行）組織の思想、政治路線をふるいにかけたこと、この歴史的必然性を持った思想問題・思想斗争の課題に連赤はまず最初に挑戦したこと、このような課題への挑戦は日和見主義者の恐怖の対象であり、この挑戦それ自体が一つの革命的・歴史的意義を持つこと。

(2) 従つて歴史的必然性・意義を見ず革左や清算主義の如

質をデマは飛ばさないで欲しい。

(4) 確かに「共産主義化運動」なる誤ったブルジョア的思  
想斗争一整風運動の中に暴力がもちこまれた事は、この思想斗争の反動性を決定的なものにし、その誤ちを致命化。拡大し反革命化させるテコの役割を果たした事を意味します。

だがこの暴力は「共産主義化」総括を援助する為の暴力であり「暴力的分派斗争」の暴力とは明確に区別されるべきです。  
「新党」内の「共産主義化運動」と対外的な「暴力的分派斗争」とは全く性質が異なつてゐること。  
「共産主義化運動」と「暴力的分派斗争」との混同に革左の連赤敗北の総括の根本的誤ちが表明されており、前者は現実化したが、後者は現実化していづ、「予定」の域にあつたこと——革左はこの予定上の暴力的分派斗争を度はずれに強調し、ここから一切の問題を抱えようとするわけです。

この点を踏まえるならば「共産主義化のテコ」としての暴力「は既に二名の同志の「肅清」の中に原初的に存在し、それが二人「肅清」一遠山同志批判一新党内の疎外された思想一整風斗争の脈絡の中で大規模に質的に高度化されつつ復活していつたことは容易に看取されるはずです。

客觀的階級情勢の変化、階級斗争の新段階への到達、これに照應する小ブル革命主義からブルタリアー革命主義の路線への思想斗争一整風を基軸とする路線転換要求の發生に對して、これに応え切れず、この路線転換を疎外化し歪曲したもを果たすこと。

(b) 「新党」指導部は両組織の歴史的限界性に規定された弁証法的唯物論。史的唯物論、そしてこの適用としての資本主義批判をもつて開始されるブルタリアー世界觀。M-L主義の思想的・政治的路線を提出できず、思想性を宿命論的。決定論的にブルジョア人間学の次元で把えることから抜け出せず、それ故に思想を何かしら偶然的な天与の產物として把えることによつて指導者たる自己の人生觀一倫理觀一資質を絶対的な天賦として把え、下部同志のそれも天賦のものとして把えることによつて下部同志を指導者に隸屬せしめるような対応をしたこと。

(2) ブルジョア人間学は歴史や生産關係。社会關係と切り離して、超歴史。生産關係。社会關係的に人間一般を論じようとする。ブルタリアーの階級思想は一般には、一方では依頼すべく階級基盤を正しくし、これを改造し、更に一方

して M-L 主義の資本主義批判の立場・方法・観点に基いてイデオロギーと階級的基礎の関係を解明し、その物質的基礎を批判。改造し、この斗争を基礎にしてのブルジョアイデオロギーの徹底した批判を通じて獲得されてゆくこと。我々はブルジョア人間学の「資質主義」は排さねばならないが、ブルタリアのマルクス主義の地盤の上では正しい組織原則と結びつけて思想斗争は積極的に推進されねばならないこと。

(4) 指導部が思想問題。思想斗争をブルジョア人間学とそこから必然化される誤った思想斗争の形式。方法に疎外化させ、反動化させその度合に応じて下部同盟員や中堅層をして、自然発生的なプロレタリア批判勢力に追いやつていったこと。従って「共産主義化運動」はその別側面に於てブルジョア的小ブルジョア的な路線対消極的。自然発生的なプロレタリア革命派の路線斗争の性格を持っていたこと、従って「共産主義化」の現象形態は肅清者と被肅清者との関係が転倒しさかさまに表出されること、部分的なズレや正当性は存在するにせよ。だから、表出されている事態をひっくり返してあればその中に、思想問題。思想斗争の本質を探ることができること(従って革左の如く「エロ・グロのブルジョアの獵奇的趣味」と称し「共産主義化」の実態分析を回避するのは、自己のデータラメな「政治路線の肅清」という嘘を隠す小細工以外の何物でもないこと)。

なければならぬ。

(5) 「新党」は國際・国内情勢の客観的变化・階級斗争の新段階への到達の中で、既存の小ブルジョア的革命派が更に今一層の飛躍が問われ、直接的には小ブル民主主義の「左」・右の潮流、小ブル民族主義の「左」、右の潮流の克服と M-L 主義のプロレタリア革命路線—プロレタリア革命派にこれを再編成することの客観的情勢を背景とし、歴史的必然性を持つていてこと(現在この課題は果たされないまま、停頓したままである)。

問題はかかる客観的要請が両組織の非マルクス主義の小ブル性の諸弱点故に、疎外化され、反動化され、プロレタリア革命派が圧殺されて本質が逆立ちして現出されていったこと、ここに事態の解明を混乱させ、複雑さ、困難さがあったこと、従って「新党」指導部の立場・方法・観点は許容できなくて、にせよ、彼等が革左(神)や赤軍派内の民主主義右派の傾向と斗おうとしたことは——その方法・手段は別にして——充分な道理があつたことを見落としてはならないこと。

大体以上の点です。

以上の諸点からして「共産主義化」—「肅清」は革左(神)の諸君の考えるが如く、「社会主義革命派の民民革命派への内ゲバ・リンチ」などの陳腐極まる政治路線肅清では全くないこと、これは獄中の窓から見た、連赤「新党」敗北の一画面化。恣意的解釈にすぎないこと、「共産主義化」(の暴力)

と「暴力的分派斗争(の暴力)」とは絶対に混同されではならないこと。

「内ゲバの経験」(これは何のことか。七・六のことなら「内ゲバの経験」(これは何のことか。七・六のことなら)をマスコミや伝承でもって勝手に脚色している可能性があることを強調しているが、これは、暴力的分派斗争に関する限り)を強調しているが、これは、「共産主義化」の経験は、二名「肅清」の山岳革命主義の経験から由来しているのであり、「内ゲバー内ゲバ思想の克服」などの連赤「新党」内の「肅清」は直接関係ないことであり、革左の諸君が、「反愛の意義」を強調するために作った脚本にすぎないこと。

(6) 貴方は、森君が二名「肅清」—「遠山同志批判」の脈絡、「反米愛国」の教条批判—山岳根拠地路線批判—中国革命教主義と批判」を強調し、「反米愛国を批判し抜く」と述べたことをもって、「責任逃れ」だと、「肅清を延長しており、義牲者や関係者にきつぱりと自己批判していない」と非難していますが、これは第一に、事実問題として、ちゃんと遺書でもつて小ブル革命主義の思想問題の解決の誤ちを中心にして路線転換の誤ちを全般的に展開し、かつこれに抵触する誤ちはキッパリ自己批判していくし、嘘であること。

第二は、君は森君が、二名「肅清」「遠山同志批判」「中國革命教条批判」を撤回しなかつたことをもって「責任逃れ」だとか「無反省」だとかいつてくるわけだけども、森君の上

この「新党」内の党内斗争と对外的な反革左や右派「肅清」算主義派との党派斗争とは性質が違うし、絶対に同一視できないこと、对外的党内分派斗争の性格は小ブル革命主義の「左」派対小ブル革命主義の「左」派。或いは小ブル革命主義の「左」派対小ブル稳健主義の争いであり、これは「小ブル革命主義」(或いは穩健主義)の同一平面の党内一党派斗争であり、これ自体の中に学ぶべき新たな教訓を吸み取ることは少ない。従って「共産主義化」—「肅清」の本質は、小ブル革命主義の「左」派(反動化派)とプロレタリア革命派の党内斗争であり、大きく見れば、小ブル民主主義の「左」派の両派、小ブル民族主義の「左」。右両派とプロレタリア革命派との党内一党派斗争であったこと。未熟な自然発生的プロレタリア革命派は「新党」外の小ブル民族主義派や小ブル民主主義派には全く幻想を持っていらず、これを克服の対象にしていたこと。对外的党内一党派斗争の内面化あるいは内包的反映として「新党」内の「共産主義化」—「肅清」を抱えることはできないこと、革左(神)の獄中グループは「加藤意見書」などを持ち出し、これを歪曲。内容をすりかえつつ、「新党」指導部とその下部プロレタリア革命派の思想斗争、党内斗争を陰蔽し、亡くなつた旧革左の同志達を獄中グループを支持する部分の如きデッヂ上げを行なつてゐることをはつきりと確認しておかねばならないし、我々は連赤敗北の総括をプロレタリア革命派の立場に持ち行つていか



任を取っているのだが、その根底にはプロ・人民とプロ・党建設への貢献という観点があり、総括はこの方向に向け深化されるべきで、お互いに背反し対立する方向であっても何も論争、を回避する必要は全くないのであり、徹底して論戦し白黒をつけるべきなのです。

そもそも総括論争を官僚主義的・権力主義的に抑圧できるとしても思っているのですか。又、我々が君達を批判するのは、君対の連赤一「新党」敗北総括が間違つており、こんな重大な経験にも拘らず人民に帰与すべき総括をせず、手前勝手な、感情と自己正当化の「総括」をやつてお茶をにごしていると、いうことについてです。

連赤旧革左の弱味に突け込んで、自分達の都合のいい総括を押しつけ、その総括の核心を永田君の資質や木下派のせいにし、（そして結局は森君や赤軍派のせいにし）自らの理論、路線の弱点。脆弱性の所産として総括せず、又、自らがこの敗北を促進した要因（最初の戦斗由主義の合流方式の容認と、他方での指導権が奪われそうになつて権力主義的に合流反対になつた面）があり、イデオロギー的指導を發揮し得ず、結果は旧革左同志に見放されたことがわからず、かかる問題として「何故に全ての同志が反米愛国を放棄したのか」を深刻に考える誠実さを持ち合わせていて、自らの敗北を勝利と倒錯し、開き直り、この自己正当化をもつて、連赤一「新党」を観念的・恣意的に「社会主義革命派による民民革命派への

君は「自分達の誤ちを他人に押しつけてはいけない」「自分の頭と手をもつて、自分の足と手で立っている」と主観的に考えようとしているのかもしれないが、君の主眼はこれとは正反対に、「責任を森君に押しつけ」「獄中革左に全面屈服し、彼らのいいなりになるロボットになつてゐる」としか客観的には思えないんですよ。

このようないい面の内面的確信抜きの政治的対応の故にこそ、核心を衝いた本質的批判が展開されるなら動搖し「去勢されてしまふ」と感じてしまうのです。  
とはいひ、我々は君達の敗北的誤ちの責任を不問に付していふなんて思い違いをしないで欲しく。我々は、君達が君達の立場に立つて責任をとつて自己批判すべきなのは当然の事です、問題は獄中革左の誤った総括に安易に清算主義的に屈服しないことこれでは連赤と「新党」の、積極的側面すら洗い流してしまうからです、又、革左は旧革左に責任を押しつけることはできないこと、革左自身の眞摯な誠実な総括が必要であるということ、これが全く提出されていないことを彈しているのです。

⑥ 山岳根拠地路線に関する獄中は責任がないといつてい

るが、五一綱領や五〇年武斗を無批判に踏襲している政治的立場に立つてゐること。アナルクロの間違つた中国革命の教条と民民路線の帰結として、山岳を農民斗争（農民の民主主義斗争）の中心として根

「政治路線肅清」なるデータラメ極まる総括視点をデッヂあげ、結局は連赤敗北の教訓を「内ゲバ思想」の克服に卑小化する、このような総括をなんで許容できるでしょうか。「ドブレ主義の無原則な組織合同だ」なんて言辞はRGや反愛教条主義者の言辞ではあれ、ひとたび反愛教条主義を批判し、これら訛別し、反スタトロツキズムと毛沢東教条主義の同時・相互止揚を目指した旧革左の同志達にとって、総括の軸となる筈がないのです。

「革左系にあつては責任は我々にあります。。。政治的に組織的にも断罰しその上、「肅清」の対象にしてしまいました。。。」  
一体、君は死んだ同志達やプロレタリア人民に自己批判しているのか、それとも獄中革左に自己批判しているのか。まるで君の眼中には、獄中革左を「。断罪し、嘘。中傷。個人批判。。。」といった悪質な手段を使いました」ただけが自己批判の対象になつてゐるようではないですか！ 獄中革左に坊主ざんげする前に、亡くなつた同志達やプロレタリア人民に、真陥に科学的に自己批判をして欲しいものです。「反愛を何故に放棄したのか」「何故に『新党』に賛成したのか」、「何故に獄中革左を批判したのか」、このことについて真に突きつめて、現在の政治的怯懦によらず、現在の知的政治水準のみで単純に判断せず、―― 考えて欲しいものです。私は君の総括態度に一番見えやすい坊主ざんげを見出してしかたがないのです。

拠地にすえざるを得なくなることからして、革左にとつては單なる軍事上の判断以上の、政治上・戦略上の方面で重要な位置を占めざるを得ないこと、この路線に誰も民民路線の立場に立つ限り決定的に反対することはできないこと。実際、川島君は「銃撃戦と『肅清』」でも大いに山岳の意義を説いてゐるのではないか。我々にとつては軍事上の、戦術上の利用対象としてしか――その限りで地理的条件も重要な要素として考へる――考へられないことが、君達にとつては政治上・戦略上の位置を與えてしまふのです。君達には單なる地理的条件も路線上の本質的位置として錯認されています。

幾ら統一戦線を強調しても労働者無視の（民族の單なる最多部隊としてのみ把えられる）民民統一戦線では、山岳根拠地を中心とすることを全く排除しないこと。これを排除するのは、反帝、反米のプロ独をめざすプロレタリア統一戦線のみです。統一戦線一般を主張して「山根」を排除できることはできないこと、プロレタリア統一戦線の中で初めて、「山根」は軍事上・戦術上の利用対象として正しく位置付けられること。

山岳根拠地路線の批判は我々にあつては、その軍事戦略上の誤ちの批判に眼目があるのではない。あなたは我々の山岳路線の批判を誤解しているが、山岳根拠地路線に集約・帰結される民民路線としての思想・政治路線の、正に主觀的因素の批判をしているわけです。

かかる日和見路線が山岳という地理的条件に自らの存続を求める軍事路線の日和見をも導いたのです。山岳社会革命主義を導いたのです。

中国革命教条の民々反愛路線は、それに忠実であればある程、階級斗争の新段階と路線転換に対応し得ず、逆にその路線の階級的性質からして、幻の中の農民の中心地たる山岳への撤収をスムーズに可能にし得る。この日和見主義が誤った路線の下に意志一致されている組織であるが故に暴かれず、助長されるを得ないこと。つまり誤った路線に忠実であるうとすればする程、思想的・政治的墮落を助長せざるを得ないこと、かかる意味に於いて、連赤旧革左の同志は反愛路線を軽視したのではなくて、逆に忠実であったこと——この路線に根底的限界性を感じつつも。

階級斗争なき山岳への後退を正当化し、統制を維持しようとすれば、銃によるセン減戦——セン減戦の銃の防衛——根拠地の防衛を実践上の名分としつつ、日和見主義を隠蔽し、一方では階級斗争・権力斗争抜きの、これと切り離された小社会を共産主義社会と想定し、これに見合うべく構成員に対しても思想一作風上の共産主義的変革を要求し、観念的共産主義的人間関係を、自己流にブルジョア社会を質から超越して創出せんとすること、これが階級斗争の新段階の無対応、敗北の合理化、かつ、召換主義のブルジョアの思想斗争の地平で展開されるが故に結局は暴力に頼らざるを得ないこと。つまり

階級斗争の転換に見合う思想問題——思想斗争の課題が、革左の思想政治路線の歴史的限界性と合わさって、疎外され、山岳小社会という条件の中で純化されて山岳社会革命主義として開花していくこと、そしてこのブルジョア的思想斗争——整風運動に批判的な傾向が日和見的に形成されていくのを処刑せざるを得なかつたこと、これが二名の同志の「肅清」であり、その後の反動的思想斗争——整風運動——「共產主義運動」の原形をかたちづくっていること。ただ、われわれが留意しておかなければならぬことは、この作風、肅清が階級斗争の新段階に照應せんとするテコたる思想問題——思想斗争——作風——規律、処罰の地平に、誤ってではあれ排戦していき側面を忘れてはならないこと。

旧革左の諸君は、階級斗争の発展に對して正しい前提にたつたこと。だが、これを誤って解決していたこと。従つてさかさまに疎外されて現象したこと、かかるの正反両面の性格故に、正に「左」翼日和見主義故に、連赤——「新党」の中に復活し、大規模化せざるを得ない必然性があつたのです。この二名「肅清」の中には、貴君かつ森君に於いて、「始めて提出された」と強調する暴力も充分提出されているわけです。従つて二名「肅清」——山岳根拠地路線と、『共產主義化』——「肅清」とは、全く同一軌道にあり、その赤軍派と「新党」による大規模な復活だったのであり、決して論理の飛躍ではないこと。これは对外的「暴力的」分派斗争とは、相対

的別個なものです。階級斗争の新段階への無対応。路線転換の挫折——中国革命の教条民々路線の思想政治面に於ける歴史的限界性が山岳への撤退という敗北を結果し、今度はこれが前提条件になつて全面开花したこと、従つて貴君の主張とは違つて二名「肅清」は、「水滸化」とかの技術上の問題では全くないし、「政治思想輕視」ではなく、中国革命教条の反愛路線を重視したからこそ發生したのであること。

勿論、赤軍派もこの路線転換に應えきれず思想政治上の限界に縫着していた。ただ、民々路線——山根路線への批判や「プロ独・社会主義路線」があり、まがりなりにもプロ（都市）に依拠し、これに結合しようとする志向をもつていていたが故に、またこれに見合つて一定の政治指導力を、第二次綱領論争の中でも、一定程度獲得していたが故に、比較的「左」翼日和見主義への後退は遅く、革命的6.17斗争や作戦を、七一年六七月段階で展開した後であつたこと。尚、我々は都市の地理的条件を強調しているのではなく、都市に表現される社会的・政治的条件（プロ独・社会主義革命）を問題にしているに過ぎないこと。このことは「新左翼」紙でも充分展開しています。

以上からして、階級斗争への未対応と、この挫折、重大な一要因としての山岳という地理的条件を、特殊に重視する

中国革命教条の民々路線に求めているのであって、正に主觀的要素に求めていることです。

貴方は、「共產主義化」——「肅清」の本質たる小ブル革命主義の「左」派が、思想斗争をテコとする路線転換の挫折、自然発生的プロレタリア革命派の批判勢力の発生と、これとの党内斗争の発生、これを反動的思想——整風運動によつて庄毅せんとしたことが、理解出来ず、あるいはことさら、この性格を隠蔽し、「無限則的組織合同——内ゲバ肅清」なる、ありもしない「事実」——「本質」を主張しています。

しかし、旧革左同志は全員（貴君も含めて）當時、「反愛路線の毛教条」に対しては批判し、「反愛路線を放棄しており」、しかも毛沢東思想を評価し、革命戦争路線で一致している以上、その証左として、「亡くなつた全ての同志が獄中革左を批判していることからして、「社会主義革命派と民々革命派の内ゲバとリンク」などあり得る筈がなく、これは獄中革左の、反愛路線派の立場からの、我田引水の事実のデッチあげにすぎず、獄中革左の諸君のいう意味をいへば「無原則な組織合同」ではないことは明白です。

我々は「新党」の意識を全面的に否定すべきではないこと、これを要請した歴史的必然性を否定すべきではないこと、です。その上にたつて、連赤——「新党」の敗北を解明する立場、方法、觀点にたつべきであつて、貴方の如く、獄中革左の露払いになつて全てを清算してしまうことは、自らの革命的斗争のものに、自らもつて泥を塗ることになるのです。そして、自らの斗争の弱点を克服し、この斗争を継承し前進

せんとする無数の革命戦士の展望を閉ざしてしまいます。

獄中革左の諸君は、予定としてあつただけの「暴力的分派斗争」を過度に強調し、貴方方旧革左に道義的圧力をかけ、必死で階級斗争に対応する路線転換の機軸として、思想斗争——思想運動の挫折、疎外化として存在した事態の本質的性格を覆い穏やかとしているのです。何故なら、この本質が明確化することは、同時に「新党」——連赤にあっては、獄中革左の、「中国革命教条——反愛路線堅持」は実践的意義をもたない一種の政治的紋章〇〇題目にすぎなくなつてゐたことが暴露されるからです。

(一九七四・一)

塩見孝也論叢☆6

過渡期世界論の

防衛と発展のために

(仮題)

四月中旬刊行!

予価 四〇〇円

## 12・10 破防法弾劾集会

### へのアピール

本集会の圧倒的成功を切望しつゝ、結集された全ての労働者・農民・学生・市民諸君に対して、連帶のメッセージを送りたいと考えます。

破防法公判が階級裁判の典型であり、全般的な外の階級斗争に規定され、これを生きいきと反映して斗かわれるが故に、私達の公判が、この一〜二年間の階級斗争の焦点であつた連赤敗北の総括を根底に於いて争われているのは当然なことです。

での右翼日和見主義の合法路線と斗い、資本主義の原則的批判を賃金奴隸制として強め、これを現代過渡期世界の批判に適用した「國際帝国主義の侵略・ファシズム・反革命戦争を反帝国主義・反社会帝国主義の共産主義世界革命戦争へ」のスローガンにまとめ、民族解放・社会主義との指導部、中國、朝鮮、ベトナム等、アジア三国党を、批判点を留保しつゝも、公然と支持する路線をうち固めています。そして、かかる路線を、独自な国際的地下組織建設の組織問題として把え、この組織建設をテコとして、世界革命の有機の一環として「内乱と戦争を複合的に発展させた攻撃的蜂起」の先進国革命の革命陣型が必ずしも可能であると確信しています。

現在の情勢は反動と沈滯の側面を次の大昂揚と大混乱へ発展する側面が圧倒的に上まわつてゐること、印度支那三國人民の斗い、朝鮮学生決起、タイ革命、アラブ・パレスチナ革命の前進、安保、沖縄、基地・自衛隊に対する斗い、入管法、小選挙区制、刑法改悪、国統法、国鉄、健保、筑波、優性保護法、等に対する斗い、国鉄労働者の斗い、山谷、釜ヶ崎、三里塚、北富士、部落解放、在日アジア人の斗い、学生の斗い、被保安処分者、「身障者」、女性、老人等の斗い、反公害、物価値上げ反対の斗い、反弾圧救援戦線の斗い、等に、人民の斗いは底深く巨大なウネリをもつて力強く前進しています。

それ故、情勢の一面だけをみて意氣消沈せず、連赤敗北の教訓と革命の基本戦略を放棄することなく、断乎として堅持し、一方での小ブル自由主義、無政府主義のゲリラ路線と、他方

地下労働者党建設の斗いを頑強におし進めることが重要だと考えます。この基本戦略堅持の下に、現在的には全プロレタリア。人民の全ゆる斗いを支持し、この先頭に立ち、これを正規軍にたかめてゆくことに全力を注ぎ、かかる斗いの中では必然的に惹起される右翼暴力団、御用組合官僚、社民、日共、社会帝國主義、反革命、革マルや革命斗争からの脱落腐敗分子等反革命に対し、彼等との斗いをプロ独樹立の斗いとしてとらえて路線として彼等にプロレタリア独裁を強制してゆく必要があります。

私達は以上の基本観点にたって、六九年前段階峰起斗争の歴史的意義を守り「公共の安全」「予備」「共謀共同正犯」

「爆発物」等の起訴規定の階級性、データラメ性を暴き抜き、武装斗争を斗い、今、無期、死刑攻撃にいたる重刑攻撃を受けている獄中戦士達と連帯して斗い、また4・28破防法斗争の成果に学びつつ4・28破防法、第三次破防法斗争との連携をくずさず、破防法早期実効化の陰謀を打破つて、最後まで斗い抜く決意です。

最後に結集された全ての人々に私達の保釈斗争への協力を訴えたいと思います。破防法攻撃の狙いが組織中枢指導部に先制的予防反革命の攻撃をかけ、組織中枢を拘禁し、これをもつて組織解体をめざすことにある以上、破防法公判斗争の勝利の第一歩が被告の不当な拘禁体制を打破することにあるのは明白です。被告の保釈がこの鍵となっていることも明らかにあります。

## 2・13 山谷反弾圧連帯集会

### へのアピール

冬場とインフレ。不況の嵐の中、搾取。抑圧。差別に抗して斗い抜いている下層労働者の同志諸君の斗いを支持し連帯したいと考えます。同志たちの「大弾圧を大団結。大暴動で反撃する方針」を団呼支持します。

① 現下の下層プロレタリアの窮乏と抑圧の事態は、政府一資本家の述べるが如く天与の避けがたいものなのか、或いは個人の資質の問題なのでしようか？ 斷じて否です。個人の責任でもなければ如何なる社会でも解決されない普遍的なものでもない。共産主義社会では完全に解決されるものですし、現に中国社会ではとっくの昔に解決されています。

それは資本主義特有の蓄積の產物であり、資本主義社会ではプロレタリア人民にとつて不可避の宿命なのです。資本主義の下では労働は資本家共の取得の規定的目的に向け資本の下に隸属した奴隸労働としてのみ作動され、その恩恵は労働者人民にはひとつも還元されません。

社会的生産力の發展も資本の生産力としてのみ現象し労働者はよりひどく搾取されるだけで労働者。人民には何一つ還

かです。正にそれ故にこそ、検事、判事は私を三年十ヶ月にわたる長きにわたって不拘留し、政治的肉体的生命を奪うべく、一年半以上の接見禁止攻撃をかけ、転向デマを流し、最近では、父の死に目にもあわさず、執行停止を許可しない暴挙に出てきたのです。このような既成事実化を力足らずムザムザと容認してゆくことは味方陣営にどれ程の損害を招くかを、充分理解出来るが故に、痛恨の限りです。どうか心ある労働者人民に第二次破防法公判斗争と保釈斗争への協力を切に訴えます。

元されません。このような剩余価値の搾取を自己目的化する資本の拡大再生産は生産力の上昇を利用し、雇用労働力を相対的に減少させ、その結果必然的に下層労働者で構成される産業予備軍を輩出させます。この産業予備軍を利用し、資本家共は好況期にはこれを吸収し不況期にはこれを反発しつつ利用し尽くし、より搾取、収奪を強め賃金奴隸制をより強固なものにしていくのです。資本主義の下での労働の蓄積や生産力の上昇は逐には労働者に苦痛となつて襲いかかり、豊かな社会に貢献しうる可能性を労働者は一方では社会に貢献しえないまま他方では資本家の好都合に合わせて滞留されてしまうのです。

このような産業予備軍は生産手段が共有化され労働が社会の欲望に応じて正しく配分される共産主義社会では絶対に生じしないのです。勿論資本家や御用理論家が「う如き『労働者階級の子供の生み過ぎが人口過剩を生んだ』とかはまつかを嘘です。

② 今、技術革新の下での労働者の搾取強化。農民のプロレタリア化。第三世界人民の搾取原料の收奪を原動力に強蓄積育成等を誇った日帝はその予盾を國際帝国主義の崩壊の進展を背景に、そして石油危機を契機に大爆発させた。国際的な人民の反撃、荷重なインフレ。買い占め騰貴、「物不足」公害、國際帝国主義からの孤立。etc. この矛盾の爆発に対し、

日帝資本家階級は強蓄積をやめるわけにはいかず、一層これに埋没し、より專制的な國際的、国内的蓄積構造を再編強化すべく、第三世界人民の搾取・収奪。労働者の專制支配の強化、農漁民の切り捨て策と、重なるプロレタリア化。小経當層の零落の促進。<sup>トコ</sup>この矛盾を國際的、国内的人民に一切転嫁して、これに反抗する人民の斗いをなし崩しファシズムで圧殺してのり切らんとしています。この矛盾、転嫁の中点に国内下層プロと國際被抑圧人民があるのです。正に、マルクスの指摘した産業予備軍の法則は、無慈悲に鉄の法則として貫徹しているのです。かくて我々の斗いは社共の如く資本主義の改良的要求を掲げることでもなければ、いわんや資本家政府に幻想をもつことでもなく、或いはブルジョア博愛家の同情に甘えることでもなく、或いは盲滅法に行きあたりばったりに決起するのみでも不十分なのです。「労働者階級の解放の事業は労働者階級自らの事業である」の指示に従ひ、誰に依存するのでもなく、下層労働者は自らが最底辺に陥し込まれた必然性を科学的マルクス・レーニン主義について理解し、個人的屈辱を階級的誇りにかえて、資本主義の根底的廃絶・共産主義社会の建設、それに向けてのプロレタリア独裁、暴力革命に決起しなければなりません。

問われているのは、我々労働者階級につきつけられた隸屬、抑圧・貧困・道徳墮落・無知・差別と分断の屈辱を逆に誇りにかえてくれる科学的な革命思想。革命路線であり、自己解私もその一員として斗うぞ！

をかちとろう！

P E L P - アラブ赤軍のパレスチナ解放メジャーロ攻撃

日帝包围の斗いを支援し、連帯しよう！

下層労働者の団結万才！

私もその一員として斗うぞ！

放のためには死刑を恐れず、無期刑を恐れず、白色テロを恐れず斗い抜く、思想路線であり、このような思想路線に殉じて犠牲となつた数少ない革命家を輝かしい規範として我々の隊列の中に守り育ててゆくことです。これらの規範の中に自らの斗い取るべき党的前身を見出し、その党的下に組織された党員で組織された赤軍・正規軍を見出し、そこからの自衛武装軍とプロレタリア権力を見出すべきである。

そしてこの方向の下、「賃金斗争のゲリラ戦に埋没するのではなく、賃金奴隸制度の廃絶の斗いを組織する」マルクス主義の觀点にたち「革命的戦術を通じて改良の副産物を獲得する」戦術路線を確認しよう。我々がこの思想・路線を我がものとしたとき、同志達の戦列は、他の組織労働者や農漁民その他の人々にとって、文句なく規範とされていくでしょう。又、アジア人民、パレスチナ、アラブ人民等全世界人民と連帯し得るでしょう。

③ 現斗委の旗の下斗い、犠牲となつた五名の労働者、十九名の労働者、そして最近の四名の労働者を我々の宝として尊敬し守り、後に続くべく隊列を整えよう！

現斗委壊滅作戦の陰謀を打ち返し、下層労働者の大團結。大暴動で反撃しよう！

国鉄労働者・三里塚農民・アジア、アラブ人民との連帯する國際的・国内的統一戦線を創出し、労働者の武装を

## 弾劾集会へのアピール

革マル派の、戦うプロレタリア人民の反弾圧戦線への一連の反革命攻撃とその暴虐を厳しく糾弾し、彼等に代表される反革命の内ゲバ主義の作風の根絶を訴えます。

このような行動は、どんな言い訳によつても許されない、敵と味方をサカサカにし、敵対矛盾と人民内部の矛盾を区別出来ず、敵対矛盾の処理を人民内部の矛盾の中に持ち込み、特定の個人や集団の利益を階級的利益に優先させるブルジョア的制裁を加えるべきです。

このような集団に対して、プロレタリア革命勢力と戦う党派。個人は断乎立ちあがり、この行為の、社会的、歴史的、理論的、思想的、政治的意味を正しく解明しつつ、マルクス・レーニン主義とプロレタリア独裁の観点にたち、プロレタリア的制裁を加えるべきです。

革マル派のような行為は、階級斗争の進展の厳しさに耐えきれなくなつた彼等の世界觀のブルジョア的正体をより鮮明に表明しています。これは資本主義の危機に規定された没落の小ブルの資本主義論や、宇野の商品化疎外論に基づく黒田の「プロ人間の論理」なる個人主義のブルジョア人間学、あるいは、対馬忠行の一人よがりの反スターリン主義のソ連論の観念性をより観念化、矮小化した小ブル共産主義觀やソ連論等で構成される一個の体系化された黒田形而上学の絶対化。神格化にあります。

ここには唯物論の反映論の觀点や、階級斗争としての具体的な歴史觀、あるいは、敵と味方の區別や敵対矛盾と人民内部の矛盾の區別を可能とする資本主義批判や、これ等に基づく客觀的な階級的利益の措定の方法はありません。従つて、党建設の基準に階級的普遍性が見出せないので、階級的利益の普遍性にかわるものとして、自己の神化された「自己疎外からの解放」の「形而上学体系」が置かれ、これを絶対化する精神構造が形成されるのです。かくて、この体系に背反する諸イデオロギーやそれを荷う党派。個人を、その物質的・階級的基礎からの階級性を解明し、選別し、究極的にはその

イデオロギーの物質的基礎の革命的改造でもつて決着をつけたマルクス主義の党派斗争－イデオロギー斗争の方法をとらず、全て敵とみなして「他党派や個人のセン滅」の反革命的

する小ブル階級の危機意識の反映であり、労働者階級とマクス主義への不信の表明でもあります。

問題は、かかるファシストの行為が「反帝反スタ」の、反スタマルクス主義－トロツキズムの外皮におおわれて、その行為の階級的性格が、見えにくくされていることです。

それ故、われわれはこの階級的正体を理論的にも正しく把み彼等の「他党派解体の党建設と称する党派斗争主義」の反革命性を暴きこのような小ブルジョアの堕落と荒廃の病に、プロレタリアートが絶対に感染しないよう努力しなければなりません。戦後新左翼運動は、国際的、国内的スターリン主義の社会帝国主義派に抗し、新たな革命運動と革命党をめざし誕生し、日本階級斗争に新しい地平を切り拓いてきた。

しかしこの斗いは多分に小ブル性の「左」右の日和見主義の体質を内包し、その依拠基盤が小ブル学生であった面と同時に、その理論、思想、政治面で、マルクス・レーニン主義とともにトロツキズムや反スタマルクス主義の、諸ブルジョア・小ブル的理論に影響されていたが故に、革命的激動期の到来とともに、一方ではその依拠基盤をかえつつ小ブル革命主義からプロレタリア革命主義に自己止揚するか、それとも小ブル性を反動化させ、反革命に転落するかの岐路にたたかれているわけです。そして、革マル派は、六七～六八年以来、公然と反革命への道を歩みはじめたのです。

革マル派の反革命の理論的根拠は、武谷三段階論に基づく

党派斗争至上主義を導いていくわけです。従つて、我々は革マル派の反革命内ゲバ主義の克服の斗いには、小ブル人間主義の反スタマルクス主義－反スタトロツキズムの理論的思想的克服、消滅と一体でなければ不可能であることを、確認しておくべきではないでしょうか。

このような反革命内ゲバの歴史は、革マルやそれに影響された新左翼の特許ではないこと、この根源はロシア革命の挫折、スターリン主義への変質の中にある。これがコミニテルンを通じ、日共の中に流入し、一般化したこと。このようなスターリン主義の地平は、残念ながら未だ我国に於いては克服の端緒についたにすぎず、我々はこの点に於いて、「人民、人民のみが歴史を創る唯三の原動力である」という觀点にたち、敵対矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理することに成功しつつある毛沢東思想－プロレタリア文化大革命に代表される民族解放斗争と、アジア共産主義に多くを学ぶ必要があります。

とは言え、日本毛派の諸君がこのことを正しく理解し、スタークリン擁護をやめたわけではないのですが。

革マルの反革命行為に對して断乎たる態度をとり、その制裁を断乎やり遂げねばなりません。我々はミソもクソも一緒にして、論戦や党派斗争全部を、内ゲバと称して否定する小

ブル日和見主義とはつきり一線を敷かねばなりません。しかし、それは、内ゲバの内ゲバに墮落されではありません。我々の態度は、革マルを粉碎すること自体が、即、内ゲバそのものの廃絶をめざす「内ゲバをなくす戦争」でなければなりません。それ故に、日和見主義の修正主義に対する斗争とは、いえ、小ブル革命主義の噴激に押跪するのでは駄目なこと、労働者人民の日常普段の具体的斗争に深く結びつきこの利益を守る觀点で、これと遊離せずに斗うこと、軍事的打撃面にのみ依存するのではなく、思想面、政治面、理論面の勝利に重大をおいて、この反動の梁山泊、反スタマルクス主義の理論的撃滅をめざすべきです。そして何よりも革命的左翼内に正しい論争戦の作風を打ち立てるよう努力すべきです。

このような基本觀点が忘れ去れ、思想、政治、理論の前進を伴わない反スタマルクス主義の枠内での争いに終始し、小ブル反スタ主義のへその緒をきらず、「内ゲバの為の内ゲバ」に変質するなら必らずや革命的左翼の内部に、かつてない腐敗と堕落・荒廃を生みだしていくでしよう。そして小ブル革命主義を反動化させてしまってはしよう。

階級斗争の進展と新段階への到達が革マル派の反革命化を生み出したと見えられる以上、我々においては、革マル主義を真に克服するとは、この新段階に対抗し得る革命的な思想、政治、組織、戦術、路線を打ち出し、これを実際に実現することに他ならない。つまり、五〇年代一六〇年代の相対

的安定期から過渡期の小ブル革命主義の路線をプロレタリア革命主義に転換すること、反スタマルクス主義——反スタトロツキズムとの訣別とともに、これを止揚した弁証法的唯物論、史的唯物論、資本主義に基づくプロレタリアの革命思想の獲得、スターリン主義とトロツキズムを批判し、毛沢東教条主義を克服し、民族解放斗争と毛沢東思想を正しく把え、プロレタリア国際主義の路線を獲得し、単純社会主義論や反米愛國路線を克服し、具体的なプロ独立社会主義路線を樹立し、愛動的蜂起主義や小ブル革命戦争を排した、プロレタリア革命戦争の反帝反米の攻撃的蜂起の陣型を獲得することです。私達赤軍派と革命的左派、連合赤軍派は、このような課題に一方での反スタマルクス主義、スターリン主義の克服と、他方での正しい路線転換という——誰よりもはやく接近し解決せんとしつつも、銃撃戦は貫徹したものの、結局はこの課題を挫折させ、小ブル革命主義を反動化させ、ブルジョア的思想運動一整風運動を組織することによって、プロレタリア革命派の同志を殺してしまい、一時的敗北を蒙りました。

我々の敗北はスターリン主義や、反スタマルクス主義の克服、路線転換に、思想的、政治的に正しく対処出来ず、矛盾を内面化させ同志肅清にいたったわけですが、反革マル戦争が小ブル革命主義的に歪曲され変質するならば、連赤の敗北した地平の問題を、外化して表出することになり、そしてそれはいづれは内面化することになります。

本集会に参加された革命的プロレタリア、労働者、学生、市民の皆さんには、この点を深く考慮されて反弾圧戦線の強化と、この破壊者に対する戦いを強化されることを心から望みます。

国際・国内人民は、分裂するのではなく、団結し、更に前进しよう。

日本一世界プロレタリア共産主義革命万歳！

## ブルジョア・マスコミの無節操かつ

### 小ブル自由主義的使用に反対

坂東国男

週刊誌「微笑」「女性自身」を読んで、その内容以前に、まずブルジョアマスコミの無節操かつ小ブル自由主義的使用については反対であることをはつきりさせておきたい。かつてM、N君の手紙類が週刊誌で「公表」され、この時も口が陥っぱくなるほど反対し、最低限の規律は今後守れるであろうと思っていたのですが。心ある労働者人民が今だにこんな政治的無原則を我々が許していくのかという疑問をとりはらうためにも大衆的に明らかにしておきます。「連赤」敗北後ブルジョアジーと一体となつた、あたかもかつての大本営発表とでもいふべきブルジョアマスコミの反共反連赤キャンペーンが行なわれ、単にブルジョアジーに反対をかけられるといふことだけではなく、マスコミのブルジョア的階級性政治性をあますところなく、自己暴露しました。こうしたマスコミの我々に対する観点は決して変わるものではありません。我々がブルジョアマスコミを通じて連赤問題を労働者階級に正しく訴えることができると考えるのは幻想もはなはだしく、誤まつてすらいます。今回の場合は以前の週刊誌問題

とすこし違ひ、連赤裁判闘争、連赤問題と密接につながつており、記事の内容について批判しておきたい。

「微笑」は編集者のファシズム思想、保安处分思想が一貫してつらぬかれているということです。これを企画した「迫る会」の諸君の主觀的意図とは別に、全体の構成が、米、日帝国主義の暴力と政治的反動、その具体的なあらわれである東拘の反動的実態の暴露によって米、日帝国主義に階級的怒りを向けるのではなく、永田君をさらしものにし、そうすることによってブルジョア思想、ブルジョア独裁思想で連赤の闘争を矮少化することに手を借するものであつて、それ以外の何物でもないということです。永田君の手紙が全文公表されているにもかかわらず、永田君に対する不当な弾圧が彼女の行為からして当然であり、「あんな事件をひきおこしておいて、いまだに権力をのろいづけていてかってなことを言うな！」と言つてゐるとしか読みとれません。しかも今なお不届に闘おうとしている永田君が悪いことをしているかのように、反省も知らない「非人間」であるかのようにきめつけています。「房内にかざされている花だけが…」といった記事でしめくくつており、米、日帝国主義と非妥協的に闘い、革命戦士として闘かわんとしている彼女を、さらには我々を「懲」ときめつけようとしているのだ!! 階級と階級闘争が存在している社会では、すべての社会現象は階級闘争と密接につながつております。人びとの階級的立場が違えば、問題を観

察し分折する方法あるいは展開する内容も違つてきます。永田君の手紙の内容、リブの諸君の主観的意図とは全く相反する記事の内容になつてゐるということです。

さらに私が問題としたいのは「女性自身」の記事です。

我々と共に闘うべき井上弁護人が、あの記事を読むかぎりでは全くブルジョア的觀点から連赤問題を考えていることに對する驚きです。連赤問題については私と植垣君が協力してこれならの意見陳述で明らかにしようと努力していますが、

こうした問題について今まできつちりと弁護士（団）に意見を提起できなかつたことについては卒直に自己批判します。しかし、「女性自身」の記事の内容について、ひどくピントであり、これを批判することは連赤裁判闘争を發展させるために必要だと考えます。政治的無節操、小ブル自由主義的マスコミを利用したことに対することと同時に、その内容があまりにひどい！！！すこし引用しておきます。

「家族は彼女の問題には何の関係もない」とことわって、「たしかに悪い家庭環境が犯罪を生まないとは言わない。しかし政治的確信によつて何かやらうとした人間については、家庭の影響を誇張することは、むしろためにする議論である。」「むずかしくいえば、禁欲主義からは何のをも生み出さない」といふことだらうが、政治運動としてそこに誤りがあったとしても人間としての魅力はまた別である。」「異常な環境におかれた集団にはそうしたことは決して

珍らしいことではない。敗戦直後日本人捕虜の集団にも、人民裁判、リンチが激しくあつたと言われている。しかしこれだって、ただ環境が異常すぎたと説明するだけでは本当のことをとても伝えることはできない。。。暴力は人間の悲しい業であろうか。」

「彼女も並みの人間であることを物語る。」

「東京の一隅にどこでもみられる平凡な家族である。永田君は母親のいうところによれば、これまた誰とも変わらない気の小さい娘である。だが連合赤軍事件はおきた。世の中はそれに大きなショックを受けた。なぜ彼女を中心てこんな事件がおきたのだろうか。まだ私には自信のある答はない。」井上弁護士はマスコミの記事がいかに歪曲されでたらめであるかに義憤を感じ、かつ「平凡な家庭で生まれた氣の小さい女の子がなぜこんな事件をひきおこしたのか」ということによつて、連赤問題が特殊な問題ではなく「大衆」自身の問題であり、「社会」の問題であることを訴え、かつ永田君が「悪人」ではないことを主張したかったのでしよう。だが、そうした「善意と欺瞞」の主観的な意図とは別にこの記事を読んだかぎりではそらは読みとれない。

ブルジョアジーが貫して主張してきたように、連赤問題の発生原因を個人的能力や資質にとめ、とりわけ森君なきあとは、永田君の能力、資質にもとめる内容になつています。社会的諸関係を一切問題としないブルジョア思想であり、

歴史を社会の発展を主觀（精神）にのみもとめる觀念論形而上学です。だが、こうした觀念論形而上学の階級的根源がブルジョア階級の利益と要求にあるということです。現段階で永田君と母親（両親）とを結びつけ、彼女と両親のことをもち出すのは、事件の原因を彼女の資質に、そして血縁関係に求める—典型的にはあのナチスの虐殺を導いた保安処分思想——ファンズム思想を暗にみとめてしまつてゐるのではないどころで、血縁関係が問題とされ、個人の資質と能力のみが問題とされています。

連赤問題は階級闘争の問題であり、我々の資質や能力が問題にされるとしても、階級闘争のなかにおける思想、政治、組織問題としてであります。決してそれは人間一般としての問題ではありません。ブルジョア社会では、個人は、それ以前の歴史上の時代には個人がある大きな人間集団の付属物にしていた自然的紐帶などから解放されてあらわれ、社会的關係の様々な形態が個人に対し、その個人的な目的のたんなき手段として、外的な必然性として相対するようになりました。ブルジョア社会の個人は一つの歴史的結果であつて歴史的發展ではなく、また歴史的に生成する個人であつて、自然人は存在しません。人間（個人）は社会的諸關係のなかで個

別化されてゐるにすぎません。人間一般として我々が存在しているわけではなく、階級社会では階級として存在しています。すべての諸事件は階級闘争の問題です。また、資本主義社会では、ブルジョアジーとプロレタリアートとの「国民」の分裂という特徴の他に、資本主義の蓄積の法則によれば、資本家階級への巨大な富と文化の蓄積は、労働者階級への「貧困、抑圧、隸屬、墮落、搾取の増大」の蓄積であり、これが労働者階級の闘争をひきおこし、闘争を通じて傾向として貢ぐのです。それ故、犯罪の原因是、個人の能力、資質、あるいは悪い家庭環境とは全く関係なく、資本主義的生産諸關係によるものであります。ブルジョア階級は、犯罪を個人に環元する論法で、階級闘争を個人に環元し、その資質及び行為の反社会性をとりあげ、革命を犯罪にしたてあげます。社会的存在が社会的意識を決定するものであり、人類社会が階級にわかれながら、超階級的な統一的な社会的イデオロギーは、あるいは「全人民」の主義などといふものはありません。ですから、連赤問題（連赤の生成の必然及びその生成、発展、消滅の運動法則）は、我々の主觀のみの問題ではなく、七一年革命の客觀的存在から明らかにされなければならない。もちろん弁証法的唯物論の認識論は能動的革命的反映論であり、主觀が世界を改造すること、主觀の演ずる役割を否定するものではありません。だが、決して個人の資質、能力の問

ではない。この点、肅清問題についてすこしのべておきたい。我々は、世界革命戦争の対峙段階—日本階級闘争の共産主義政治（軍事）闘争への到達を導いていた七〇年安保大會戦のなかで、我々の組織的基盤をプロレタリアートの隊列にまげこまれた小ブルジョアジーとプロレタリアートとの一部におくのから、真にプロレタリアートにおくことが要求された。目的意識的内乱を担いきるために、何よりも組織をプロレタリアートの世界観、プロレタリアートの独裁思想で改造することが要求されたのです。思想、政治問題のプロレタリア的解決が何よりも要求されたのであり、社会主義のための不退転の闘争を闘う組織の規律、作風問題の矛盾の激化として現象したのです。組織問題、規律、作風問題は目に見える思想、政治問題であり、組織—規律作風問題の解決は緊急の課題となっていました。

目的意識的内乱を指導するプロレタリアート党への飛躍を要求された我々は規律作風問題—思想問題の解決なくして一步たりとも前進できない壁にぶちあたった。規律、作風問題をめぐる矛盾の激化は、我々が真にプロレタリアートに組織的基盤をおき、小ブル革命主義の社会主義革命路線をプロレタリア革命主義の社会主義革命路線へ止揚することを我々に激しく要求したのです。資本主義批判を軸とする馬工主義の創造的發展、トロツキズムと毛沢東教条主義を止揚して、毛沢東思想を活学活用することが党の飛躍にとって何よりも要です。

暴力についても、ブルジョアジーかプロレタリアートに反革命的暴力を行使するように、小ブル革命主義の反動派がプロレタリア革命派に暴力を行使したのです。決して「人間の美」などではありません。超階級的な暴力など存在しないのです。「肅清」は単なる「内ゲバ」（我々が暴力的分派闘争の対象としたのは「革命左派」全体ではなく、また革命左派だけに分派期定したのではない。）といったものではなく、党の飛躍の疎外化形態即ち「共産主義化」作風肅清」（正しくは小ブル革命主義とプロレタリア革命主義との路線闘争）であります。

「哲学的観念論は粗野な、單純な、形而上学的な唯物論の見地からすれば、たゞごとにすぎない。これに反して弁証法的唯物論の見地からすれば、哲学的観念論は認識の特徴、限界の一つを物質、自然なら切りはなされた神化された絶対者へと、一面的に、誇大に、度はずれに（ディーツゲン（発達させ（膨張させ、ふくらませ）たものである。観念論は坊主主義である。そのとおりだ。しかし哲学的観念論は（「より正しく言えば」）そして（「そのうえさらに」）人間の無限に複雑な（弁証法的な）認識の色あいの一つを通じて坊主主義にいたる道なのだ」）（マニン）まさに我々は「銃一共産主義化論」という坊主主義にいたつて党的飛躍に挫折し、我々の小ブル思想故に、党的飛躍の疎外化形態即ち「共産主義化」肅清を生み出したのです。ですから我々の主觀が問題とされ

求されたのにもかかわらず、我々はこのことに挫折し疎外させてしまったのです。「思想面、政治面での路線が正しいかどうかがすべてを決定する」。マルクス主義の認識路線はプロレタリアート党の政治路線の思想的基礎であり、同時に政治路線に奉仕するものですが、思想問題の解決に挫折し、「銃一共産主義化論」はブルジョア認識路線を流入させ、「即時社会主義実現路線」や「反米愛国路線」をほぼ解体してしまったのはかわらず、プロレタリア革命主義の正しい社会主義革命路線を制定し実践することに失敗したのです。指導部は小ブル革命主義を反動化させ、（小ブル革命主義を反動化させたのは獄中赤軍派には何の責任もなく、塩見氏も「銃による殲滅」路線に反対していたのであり、一部諸君がまるで「新党結成」を塩見氏が指導していたかのように言うのに断固反対しておきます。）プロレタリア革命派である亡き同志達を肅清したのです。「共産主義化」作風肅清」は七一年革命のなかで要求された思想、政治路線のプロレタリア的変革と真にプロレタリアートに立脚基盤をおくことに対する闘争に挫折した結果の產物であり、言わば共産主義化とは党的飛躍の疎外化形態に他ならないのです。我々が最初からこのような結果を望んで「共産主義化」ということを主張はじめたのではないかが、何よりも思想の問題の解決に挫折し、ブルジョア思想、ブルジョア独裁思想を流入させ、「新党」結成の際に個人批判なんかもやったのです。

以上、週刊誌問題をとりあげて若干意見を述べたのは、今後こうしたマスコミに対する政治的に無節操な小ブル自由主義的行為がなくなるよう——私はリブの諸君や井上弁護士が個人的に見解を表明することを決して否定しているではありません。——また、連合赤軍をその結果論から清算することや（七一年革命の具体的な分析と党的飛躍の解決とりわけ思想問題の解決ぬきに）連合赤軍をブルジョア思想で矮小化するのに対しても絶対に反対するという私の立場をはつきりさせておきたいと思ったからです。九日の日に「女性自身」を読んで、急いでこの文章を書いたのですが、色々と批判もあると思います。

☆ 印刷者による後註 ☆

『論叢・5』は、以下の三論文と三つのアピールを収録した論集として刊行される。即ち、塙見論文「RG批判への基本視点。メモ」、「革左（神）派の坂口君を批判す」、坂東論文「ブルジョア・マスコミの無節操かつ小ブル自由主義的使用に反対！」と、この間の集会に寄せられた塙見アピール三つである。

坂東論文は、連合赤軍公判対策委員会事務局『会報』(No.2)誌上に於いて1974年1月23日、小部数、掲載発行された。——本論文に於いて述べられている二つの週刊誌記事とは、直接的には以下をさす。

『微笑』(祥伝社発行・小学館発売)——「あの永田洋子」。衝撃の獄中書簡を独占入手——  
『私は監獄医から麻薬をうたれてる！』(74・1・5号)『女性自身』(光文社発行)——「永田洋子とその母を訪ねて」——特別寄稿。井上正治主任弁護人(74年迎春特大号)。

尚、次集『論叢・6』は、「過渡期世界論の防衛と発展のために」(仮題)として4月中旬刊行の予定である。

塩見孝也論叢★1 定価二五〇円

同盟の革命的再建のために（その一）

ある同志への手紙Ⅰ

ある同志への手紙Ⅱ

同志高原を批判す

塩見孝也論叢★2 定価二五〇円

同盟の革命的再建のために（その2）

連合赤軍敗北の正しい結括の下、プロレタリア

革命主義の旗を高く掲げてさらに前進しよう！

塩見孝也論叢★3 定価三〇〇円

トロツキズム・毛沢東教条主義を止揚し、

プロレタリア革命綱領を確立するためには

塩見孝也論叢★4 定価四八〇円

連赤の責任回避と小ブル民族主義・生産力主義を

批判し、マルクス・レーニン主義の正しい継承と

発展の実践的獲得のために

塩見孝也論叢★5 四月刊行／予価四〇〇円  
過渡期世界論の防衛と発展のために（仮題）

定価250円(元70)

連絡先=東京都葛飾区新小岩1の9の7 あけみ荘2号室 塩見方「論叢」係  
料販売行 1974年3月20日 増刷済行方・販路拡大・出版部本・有志出版社開局